

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月 9日現在

機関番号：12301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22500567

研究課題名（和文） 体操教師矢島鐘二に関する研究 我が国の学校体育模索期における活動と果たした役割

研究課題名（英文） A Study on the Physical Education Teacher, Kaneji Yajima
～A role and activities he played in the physical education developing period in Japan～

研究代表者

福地 豊樹（FUKUCHI TOYOKI）

群馬大学・教育学部・教授

研究者番号：40134267

研究成果の概要（和文）：

本研究は、体操教師矢島鐘二の大正期から昭和戦前期までの活動を明らかにすることを目的とする。

群馬離県後の矢島は、体育行政、学校管理職を歴任し、体操の実践活動からは離れたが、その実践で得た経験をもとに、多くの教育活動の成果をあげた。昭和初期を通して台頭する競技に対しては、運動家精神（スポーツマンシップ）を失うことなく、教育的な配慮が必要であることを説いた。戦時体制下にあっても、その生き方は、一貫したものであった。

研究成果の概要（英文）：

This study was conducted for the sake of making some facts clear, that were activities which had done during from the Taisho period to the Showa period before war broke by Kaneji Yajima, a physical education teacher.

After leaving from Gunma prefecture, he stopped actual activities regarding to gymnastics and took an administrator. Though, based on the experience which obtained from that activities, he archived a lot of success in the educational field. He also insisted the importance of educational concern and sportsmanship against newborn sports on the rise in Japan in the Showa period. Even under the control of war structure, his way of thought has never changed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
2012年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：体育史・スポーツ史」

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・スポーツ科学

キーワード：体操、体操教師、矢島鐘二、学校体育

1. 研究開始当初の背景

矢島鐘二という体育指導者は、大正2年の我が国初の体操指針「学校体操教授要目」の成立を契機に、全国的にその名を示すことになったことが知られている。群馬県師範学校に勤務と同時に群馬県視学を兼務し、県下の学校体育に尽力していった。壮丁年齢の体力低下問題は、国策として大きな話題となっており、欧米文化の受容に加え、国際的な政治状況は国民教育の質や量の充実が大きな課題であった。体操教育も例外ではなく、その具体的な模索が始まったばかりであった。群馬県におけるこの時期の体操普及の状況を明らかにした研究（福地の先行研究：「大正期の群馬県における学校体育の展開 第1報～第3報」、1987～1989年）は、本研究の前提になっており、矢島のその後の活動を明らかにすることが、今回の大きな課題と言えた。

2. 研究の目的

本研究は、大正期から昭和初期にかけ、我が国の学校体育の実践をリードした体操教師、矢島鐘二の活動に焦点を当て、彼の実践活動や考え方を通して浮かび上がってくるこの時期の体育やスポーツの動向を明らかにしようとするものである。明治以降、体育システムは、困難を抱えながらも常に新しいシステムを構築しつつ展開し、教師矢島も、そのような文脈の中で、実践史上、貴重な資料（実践の試み）を提供していた。本研究は、その歴史的な意味を再考しようとするものである。特に、群馬県の体操実践後の彼の活動を明らかにすること、この場合、体育領域との直接的、間接的な関わりの実態をできる限り客観的な史料（資料）を通してあとづけを眼目とした。次に、それらの活動から、彼の体育観・スポーツ観、さらに教育観を考察し、初期の体操実践が矢島自身に与えていた意味について検討を加える。最後に、この時代の文脈に体操教師矢島鐘二は、どのように位置づけられ、時代を映し出していたかについて考察を試みた。

3. 研究の方法

3年次にわたる計画・方法は以下のようなものである。

初年時には、研究の基礎的な資料収集をこころがける。歴史的な文書史料（資料）や聞き取り調査から得られた資料の収集を目指

す。矢島の個人的な年譜をつくり、その後の調査の手順を組み立てる。大正期から昭和初期にかけての矢島の足取りを調査し、彼の体育観やスポーツ観を明らかにする。

2、3年次にかけては、彼の活動と社会的な状況との関わりについて考慮しながら、矢島の主張した体育・スポーツの考え方について検討を行う。特に、清水善造をめぐる美談の創出の背景には、矢島自身の状況が大きく関わっていたことについて、考察を深める。矢島の晩年期の活動は、体育領域に直接関わった訳ではなく、行政職・学校管理職として、その任にあたったが、体操教師時代の実践がどのように反映されていったか否かを検証する。体育システムの時代的な意味と自らへの思想的な反映を考察する。

全体を通して、矢島の活動を明らかにするための史料（資料）収集を継続する。

4. 研究成果

本研究で明らかになったことがらは、以下のようによまとめられる。

（1）秋田県における矢島の教育活動

昭和3年、矢島は秋田県立花輪高等女学校校長としての任に着き、様々な活動に従事する。その中でも特筆されることに体育展覧会の開催があった。秋田の県北の一地方では驚くほどの展示資料が集められ大成功をおさめる。矢島は発足間もない学校を軌道に乗せるべく、学内外の活動に尽力する様子が確認できるが、まさにこの体育展覧会は、それまでの矢島の実績をふるに活用しながらの試みと言えた。この企画が地域に与えた影響の大きさが確認された。

その他、二つの中等学校校長を歴任し、自らの教育を展開していたことが確かめられた。体育専門の校長矢島という立ち位置は、生徒には、親しみやすさや行動力という印象を与えていたことが確認された。

（2）若松市における活動

その後、北九州若松市学務課長に転身するが、そこでは、教育行政のトップとして活動を行っていた。しかし、体育活動に直接関わった経緯はみられず、地域の体育活動に対しては一定の距離をおいていたものと推測された。

この時期に特筆される事項としては、市内の小学校において自書「スポーツマンの精神」（大正14年刊）の復刻を行っていたことがあげられた。しかしながら、その出版の経緯や利用実態については、明らかにすることはできなかった。

北九州地区のこの近辺は九州大学（福岡）の医学者であり、体操教育に多大な影響を与えた桜井恒二郎の影響が強く、同時期の群馬県の体操指導者としての矢島の知名度は高かったことから、矢島の名は、この地域にも広く知れ渡っていたと推測された。矢島の学務課長時には、この地域の体操研究会が盛んであったことが確認されており、行政職のトップとしての矢島との関わりも当然あったものと推測されるが、その関わりを、あえて関わりを避けた経緯を確認することができた。そこには、矢島の体操に関わった過去の経緯の反映を認めることが可能と推測された。3年の後、矢島は職を辞し、東京へと移動する。

（3）東京光学青年学校における活動

昭和14年、東京光学青年学校の発足にともない校長として就任する。東京光学は測量器械の生産を主とする会社であったが、私立青年学校の義務教育化にあたり、生徒の育成に力を注いだ。青年学校制度は、従来の中高等教育制度から漏れ落ちてくる若手労働者層の教育を補完するものとして、この時期に成立した教育せいどであり、労働力確保が課題であった企業にとって、好都合の制度と言えた。企業経営にも合致するものと捉えられ、東京や大阪などの大都市にあっては、多くの青年学校が設立、運営されていった。

矢島の校長としての活動は寮夫を兼ね、それまでの教育観に基づき、労働に貢献する態度や社会道徳を重視する方針を押し進めたことが確認された。

戦時体制が進む中、青年学校においても軍事訓練（教練等）が重視される中であって、東京光学では、軍隊的な規律訓練ばかりでなく、家族的な人間関係を大切にしている教育方針が貫かれていた。矢島という教育者が校長を務めていたことは、多くの私立の青年学校の中でも極めて例外的な事柄であったと言えた。

（4）清水善造美談について

矢島は神戸の体育主事時代に、「スポーツマンの精神」（大正14年刊）を執筆する。この著作は、矢島の体育・スポーツ観が直接反映されたものと言え、その後、我が国に伝承された清水善造美談の誕生をみることができ、この物語は、これまで多くの謎を含み、

スポーツ史分野において、その検証は行われていない状況であった。本研究では、執筆者矢島の神戸における体育行政の活動の中に生じるひとつの出来事から生み出された矢島の心情を物語るものとして、その検証を試みた。美談の意味を考察する中で、矢島の体操教育観が明らかにされた。それは、その後の彼の教育活動の根幹をなし、秋田県、若松市、東京という矢島の仕事に連動する視座をそこにみることができた。

（5）大正期から昭和初期の体育について

学校体育のシステムの確立は、大正2年の「学校体操教授要目」の成立から、さらに新しい体操理論への進化を遂げようとした時期であったが、競技（スポーツ）の台頭と戦時体制への移行期が、その確立に必要な十分な時間を与えなかったと言える。矢島の活動は、そのような時期、体操教師としての直接的な仕事から離れはするが、体操家という職責をいかにしながら教育者矢島を生き抜くことになる。しかし矢島の基本的な教育に対する態度は体操教師であった時から一貫しており、体操において目指した人格陶冶の目的は、その後の活動に大きく影響を与えていった。地域を大きく移動しながらの活動は、学校管理職、行政職、寮夫とその性格を異にしながらも、矢島の人格に支えられた教育方針は、ぶれることはなかったと言えた。体操に尽力しながら、そのシステムの変更という行政上の問題に直面しながら、自らの生き方を模索続けなければならなかったことは、一方の見方からすれば、時代に放浪され続けたものとみることができ、教育の実践者としての矢島を通して浮き彫りになってくるものは、国家的な規模の教育政策の見通しのなさであり、システム構築にあたってなおざりにされる教育現場の姿であった。個人の余りある努力により、教育実践を遂行しようとする姿は、現在の状況と重ねることができ、

時代的な制約を受けながらも、一貫していたと矢島鐘二の姿を見届けることができた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

福地豊樹「体操教師矢島鐘二の活動に関する一考察 第二報～1930年代の活動に着目して～」

群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編 査読有 第48巻 2013年

119～125 頁

福地豊樹「体操教師矢島鐘二の活動に関する一考察～群馬の体育実践以降の教育活動に視点をあてて～」

群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学 査読有 第47巻 2012年
63頁～74頁

福地豊樹「清水善造美談『美はしき球』に関する一考察～執筆者矢島鐘二の創出という視点から～」

スポーツ史研究 査読有 第24号 2011年
15～26頁

〔学会発表〕（計3件）

福地豊樹「東京光学青年学校と矢島鐘二～1939年から終戦までの教育・体育活動の一断片～」

スポーツ史学会第26回大会
2012.12.2 甲南大学(兵庫県)

福地豊樹「秋田県立花輪高等女学校『体育展覧会』(1929年)について～学校長矢島鐘二の開催意図をめぐる考察～」

スポーツ史学会第25回大会 2011.11.12
東海大学(神奈川県)

福地豊樹「美はしき球」再考
～清水善造美談の創出に関する試論～

スポーツ史学会第23回大会
2009.11.29 名古屋工業大学(愛知県)

〔図書〕（計1件）

福地豊樹「体操教師矢島鐘二に関する研究」
報告書 2013.3(全78頁) 群馬大学

〔その他〕

福地豊樹「清水善造～テニス国際化のパイオニア～」

群馬県立図書館主催講座「郷土にかがやく人々～昭和編～」

2011.8.11 第2回講座担当(群馬県)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

福地 豊樹 (FUKUCHI TOYOKI)

群馬大学・教育学部・教授

研究者番号：40134267